

菱川師宣著『当風品絵づくし』を巡って

元文化女子大学教授（日本服装史担当） 佐藤 泰子

和綴1冊本の『当風品絵づくし』(W024/382.1/H)は、B5判をやや大きくしたサイズ、27.1×18.8cmの木版墨摺絵本で、柱刻には「浮世續」の文字と丁付がある。各頁とも四周単辺22.7×15.9cmの枠(すなわち匡郭)に収められ、全21丁42頁は、序文1頁・上部5分の1に頭書を付した見開き1図の絵図20図・奥付1頁から成る。筆者および刊年については、奥書に「菱川氏筆こまかに書れし(中略)菱の川ながれうきに浮かれし」とあり、その末尾には「大和繪師菱川氏 天和二二年子正月吉日 板本鱗形屋三左衛門」と記されている。同類の書、『美人絵づくし』の奥付には「菱川氏之繪師書かれたるを取集(中略)今板行者也 大和繪師菱川吉兵衛筆 天和三年亥五月吉日 江戸大傳馬三町目 鱗形屋板行」とあり、また『岩木絵づくし』の奥付末尾には、「天和三癸亥年七月吉日 武州江城之下愚 菱河吉兵衛師宣 大傳馬參町目 鱗形屋開板」とあることから、菱川氏とは、菱川吉兵衛であり、すなわち師宣であると読み取れるのである。国学者、黒川貞道は、明治以降、海外で評価されはじめた浮世絵を国内に広めるために、墨摺の絵本35種を選定し、江戸期の手技を継承する彫師・摺師によって原本に忠実に復刻して、大正3・4(1914・15)年、和綴本『日本風俗図絵』12輯(W144/721.8/N/1-12)を刊行した。それは、筆者にとっても利用頻度の高い座右の書となっている。師宣に種々の署名があることは概説書からも知られるが、先に示した同類の2書はこの第1輯に所収されているので、是非とも参照して欲しい。次に、「天和二二年子」とある刊年について、天和期の子年は4年であるから天和4(1684)年刊行とみなし得る。では、なぜ「四年」としなかったのか。この書の初刻は2年で4年は再刻との報告がある。それは、2000年に千葉市美術館で開催された「菱川師宣」展に因

み、師宣作品の制作と流通に関する徹底的な調査検討がなされた結果による。再刻の背景には、板元鱗形屋が所有していた版木の江戸大火による焼失が指摘されている。天和2(1682)年12月28日の火災は、鱗形屋の住所にみる大傳馬町にも及んだ(『天和笑委集』)。これが史実であれば、当館の蔵書は再刻本ということになる。書名について、先の調査検討の報告には『浮世続絵尽』(『当風品絵づくし』)とあり、題箋を欠いた東洋文庫蔵本にも『浮世続絵尽』とあって、「原題は『当風品絵づくし』という説がある」とみなされている。本書では、表紙の題箋に「大和絵」の3文字が割書(並記)され、その下に「『当風品絵づくし』全」とある。ここでは、以上のような現状を示すに留めたい。

絵図は、第6・7図と第12・13図の頭書が各2図にわたるため、18項目20図となる。各々の内容を略記すると、第1図は、「ころハやよひ花も今をさかりと見へけれハいさや」と、庭の桜の下に幕を張り、古老の三味線に合わせて琴を弾く美女等を描く(男1女5)。第2図は、「なににつけてもふそくなふして浮世をおくりし」有徳なる町人の室内での様子を描く(女5)。第3図は、「京ハ目はつかしいなハ口はづかしてそのミをたしなみふく(衣服)をだて(伊達)にこしらへかづき(被衣)ちやくして」、その侍女も「雪いたくごとく成ハたぼうし(綿帽子)にて」、氏神参りの姿を描く(男1女4児1)。第4図は、阿弥陀本願の功德を説く談義をありがたく聴いて帰る老若男女を描く(男1女4児1)。第5図は、宮仕えの女たちの浅草閻魔堂参りの姿を描く(女6)。第6・7図は、深編笠に二本差と大黒頭巾の男二人そして共奴が吉原に向かい、日本堤・大門口・衣紋坂を経て揚屋町の四辻を徘徊して女郎の道中見物をする様子を描く(男4女9)。第8図は、「此ミちのしよしんなる人」に「この道ハなさ

けをもといし心にうわ（柔和）に」と説き、遊女・遊客を描く（男3 女3）。第9図は、「あげやにて女らうにあふ時しらなしふりしてさわぐもけうさ（興奮）めて見ぐるし」と記して、遊客・遊女の座敷の様子を描く（男2 女5）。第10図も、ある田舎者の揚屋での遊興を描く（男2 女4）。第11図は、遠国より殿に召し連れられた小姓の江戸遊山を描く（男5）。第12・13図では、馬場にて、大名の若殿に遠乗りを勧められた小姓たちが先を争うのを見て「人間萬事 塞翁が馬」と説く（男9）。第14図は、武家繁盛にて納（治ま）る御世、さる大名家では槍と長刀の稽古に励み、御座の間の主人の前で勝負する様子を描く（男8）。第15図は、大名の小姓たちが、「名木をとり出しつきあわすは万木皆にほひがハリて人のおもて（面）のごとし」と、香を嗜む様子を描く（男5）。第16図は、「世のおだやかなるにしたがひ（中略）遊山のみを好む人多し」と時風を述べ、京大坂の野郎役者が江戸を徘徊して太鼓三味線を奏でて諸芸を争う様子を描く（男6）。第17図は、堺町の辻の辺りを往く着飾った野郎たちの姿を描く（男6）。第18図は、花の都島原で東国の男伊達が若衆と意気地を張り合う様子を描く（男5）。第19図は、隅田川に浮かぶ屋形船内の遊興を描く（男8）。第20図は、堺町の芝居が繁榮し、世に踊りが流行るなかで野郎たちの群舞を描く（男5）。

以上より、描写人数は男71人・女45人・児2人と集計され、師宣の視線は町屋・武家屋敷・往来・

遊里に注がれ、町人・武家・小姓・供奴・役者・遊女等、多岐に及んでいる。特に第11図以降は男のみの図で、うち5図は武士・小姓、残りの5図は野郎・若衆と類別される。

このような本書を服飾資料として捉えたと、女性・役者・小姓の結髪にみる元結で強調された吹前髪と大きく膨らませた後髪（鬘・髷）、小袖（振袖・留袖・打掛）や広幅の帯と男の羽織にみる華麗な模様、襟・褌・裾と振袖の振から覗く肌着の上の下着、男のボタン掛けの足袋、参詣や遊山の流行がもたらした種々の笠・頭巾・綿帽子、歩行時の女性の片袂取や引扱帯等々に、元禄期に向かう時粧が明示されている。

本来は白黒の絵図の所々に、赤茶の色挿しが後筆されているのが当館所蔵本唯一の難点であるが、320余年前のこの作品を目の当たりにしたとき、師宣が手掛けた「北楼及演劇図巻」や「見返り美人図」等の肉筆画、「江戸雀」や『好色一代男』等の挿絵、そして100種を超える墨摺絵本にみる師宣様式が一体化して凝縮されているように思う。さらに彼の作品は、『新板当風御ひいなかた』（序題『当世早流雛形』天和4年刊）にも及んでいる。その序文には、天和3（1683）年正月に下された奢侈禁令を受けて、「惣鹿子金紗縫入の衣服すたり近き頃よりものずきがはり成ほど軽きを本とす」とある。ここにも、縫箔師の父、道茂のもとで成長した師宣の服飾への関心の深さがうかがわれるのである。



図1 浅草閻魔堂詣での宮仕えの女たち

髪型・笠・綿帽子・肌着の上の下着・小袖模様・引扱帯等が、時粧を映す。（第5図左頁 6丁表）



図2 堺町を往く芝居役者、野郎の道中

肌に白無垢・黄無垢、上には縮緬・紗綾・縷子・緞子、紅絹の裏襟、大脇差を落し差に等とある。（第17図左頁 18丁表）